

加曽利E式土器資料集成研究⑤

—内房地域編—

渡邊 玲

はじめに

当館では、平成30年度より調査研究課題に「加曽利E式土器の集成研究」(以下、本研究とする)を設定し、その成果を公表する連続企画展を開催している。本稿は、本研究のうち令和4年度に開催した企画展「あれもEこれもE—加曽利E式土器(内房地域編)—」(以下、内房地域編とする)に係る資料集成の成果を報告するものである。

報告に先立ち、本研究の概要を整理しておく。本研究の目的は、加曽利E式土器について「データベースの作成およびカタログ化を行うことで、(中略)土器編年研究上の課題を解決するための基礎資料を提示すること」にある(佐藤2019:47)。集成対象は、房総半島で出土した資料としている。範囲を限定する理由は既報告では言及がないが、加曽利E式土器の研究状況に照らし「土器編年研究上の課題」を考えるに、主に以下の2つの理由によるところは明白であろう。すなわち、第1に房総半島内部における縄文時代中期の土器の地域偏差であり、第2に関東地方における中期後葉の土器編年の整備状況である。

第1の地域偏差については、房総半島の地理的条件によるところが大きい。中期の房総半島はいまだ縄文海進の名残を留めており、西に古東京湾が広がり、北には古鬼怒湾が開口していた。そのため現在の地形とは異なり、海が四方を囲み、北西部のみが他地域と陸続する、ほぼ独立した島状の地形が形成されていた。これにより隣接地域からもたらされる土器情報の複雑な流入と展開が想定され、中期の土器群においてもその地域偏差が指摘されている(下総考古学研究会2004・2011、大内2009)。

第2の土器編年の整備状況については、関東地方の中期後葉土器編年は、事例の蓄積が進み成熟した状況にあると言えよう。神奈川編年(神奈川考古同人会1980、神奈川考古学財団2002)、埼玉編年(谷井ほか1982)、多摩・武蔵野地域の新地平編年(黒尾1995、黒尾ほか1995、小林ほか2004、黒尾2016)など、各地で網羅的な資料集成による細別編年案が提示されている。一方、房総半島については、第1の理由で挙げた文化的な条件、あるいは他地域に遅れた大規模開発の資料蓄積のタイミング、加曽利E式土器研究の画期となった1980年の神奈川考古シンポジウム(神奈川考古同人会1980)への不参加などの学史的な経緯があり、いまだ網羅的な細別編年の確立に至っていない。

こうした研究状況をふまえ、当館では「土器編年研究上の課題」を解決するべく、房総半島から出土した加曽利E式土器について、地域性と通時的な変遷の解明を目的とする本研究を開始した。また、その成果を連続企画展において公表してきた。本研究および連続企画展にあたって、当館では房総半島を地理的な条件に基づく5つの地域に区分し、それぞれの地域について資料を集成し展示解説するという構成をとった。これまでに千葉市内編、印旛地域編、北西部地域編と題して企画展を開催し、令和3年度には、称名寺式土器成立以降の段階に下る加曽利E式土器のながれを受け継ぐ土器(いわゆる加曽利E V式)をテーマとして、千葉市域の加曽利E式期終末期に属する資料を集成する企画展を開催した。

本稿では、令和4年度に開催した内房地域編に際して行った、内房地域から出土した加曾利E式期⁽¹⁾の土器の集成調査成果を報告する。なお、当館では令和6年度に「あれもEこれもEー加曾利E式土器(総括編)ー」を予定しており、これに向けて本研究成果を体系的に整理するべく、本稿では既報告から体裁を変更して①研究史の整理と②一括資料や層位的出土状況についての記載に紙数を割くこととする。

1 内房地域について

ここでいう内房地域とは、現在の行政区分でいうところの市原市、袖ヶ浦市、木更津市、君津市、富津市、鋸南町、南房総市、館山市の7市1町である。地形的には、村田川を北限として、土気～須崎を結ぶ房総半島の分水嶺よりも西側、半島南端の安房丘陵までの地域にあたる。また東京湾～浦賀水道の東岸域にあたり、東京湾に突き出た富津岬からは、わずか約7km先に神奈川県の大磯半島を望むことができる。背後の分水嶺からは養老川、小糸川、小櫃川などの河川が流れており、これらの河川が境界線となり、短冊状に区切られた台地と丘陵が南北に連なる地形が特徴的である。

加曾利E式期の遺跡は、短冊状に区切られた下総台地の上に立地し、特に村田川・養老川流域から小糸川流域の市原～木更津市域に集中する。一部の遺跡は君津・安房以南の上総丘陵にも分布がみとめられる。地理的には、東京湾の対岸の西関東に近く、また対岸に至るルートが、房総半島の北西部を経由する陸路よりも、富津岬を経由し三浦半島に渡航する海上ルートの方が近いことから、東京湾を挟んだ彼我の土器群の対比と海上交通(戸田1998・2006、上守2006)が注目される地域である。

2 研究史

加曾利E式土器について、その膨大な研究史を網羅的にまとめることは困難であり、ましてや縄文土器研究のバックグラウンドを持たない筆者の力量の及ぶところではない。よって、ここでは内房地域の加曾利E式期の理解に関わる研究のうち、特に重要な部分についてまとめることとする。

大内千年は、市原市中潤ヶ広遺跡の遺構群分析を目的として、「新地平編年」に対応させる形で同遺跡の加曾利E式期資料の細別を試みている(大内ほか2006、大内2008)。論旨は小規模集落の遺構群分析と集落論が扱う時間的・空間的スケールへの問題提起にあるが、ここでは房総半島の加曾利E式期研究における編年観についての指摘を取り上げておきたい。大内は、房総半島の加曾利E式期研究について、①特に報告書記載の時期設定や集落分析において、前半部は「埼玉編年」(谷井ほか1982)の中で千葉県事例として言及された資料に対応するところの「加曾利EⅠ・Ⅱ式」(埼玉編年Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ・Ⅻに相当)の区分を採用し、後半部に「加納編年」(加納1994)の「加曾利EⅢ式」以降を繋げるという認識がおおむね共有されており、②前半部については、「埼玉編年」以降、房総半島の資料を用いた網羅的な編年研究の事例がなく、時期細別が図られていないことから、③この場合において、細別不十分な前半部と精緻な「加納編年」に拠る後半部からなる上記の編年観は、集落を認識するための時期区分としては、その編年精度にかなりのギャップがあるという問題を指摘している(大内2008:100-102)。ここにおいて、「新地平編年」(特に黒尾1995)が強調するところの加曾利E式新・古の区分としての胴部磨消懸垂文の一般化⁽²⁾が、内房地域の中潤ヶ広遺跡において、特徴的に多出した「連弧文系土器」や口縁部文様帯を欠く土器の変遷とも整合し、上記の編年観の前半部の細分(中潤ヶ広Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期:新地平編年11c・12a・12b期相当)に適応可能であるという点(大内ほか2006:458)は重要である⁽³⁾。

これに対して、本研究ではこれまで「史跡加曽利貝塚総括報告書」(以下、総括)の区分に準拠した加曽利E I・E II・E III・E IV式の区分(千葉市教育委員会編2017:429-430)を用い、資料集成を進めてきた。既報告との整合性をとるべく、本稿でもこの総括の区分を採用する。なお、総括の区分では加曽利E II式段階について、「磨消縄文手法を持つ加曽利E式のうち、連弧文土器や曽利II式が共伴する段階」としており、上記の編年観とは、埼玉編年XI期が含む磨消技法成立直前段階について扱いが異なる点を注意しておく⁽⁴⁾。以下、総括の区分に則り、編年順に研究史を整理する。但し後半部については、総括も加納実による体系的な編年案(加納1994)に依拠するため言及を省略する。よって、ここでは細別に課題を残す前半部、すなわち総括加曽利E I・II式段階に関わる論考を扱いまとめることとする。

はじめに、下総考古学研究会による房総半島の中期中葉土器群の集成研究(下総考古学研究会1998・2004)のうち関連する部分を参照する。下総考古学研究会による諸類型の整理と分布の検討によれば、房総半島の中期中葉土器群では①いわゆる「中峠類型」はおおむね村田川以北の下総台地に偏在する傾向があり(同1998:36-43)、②勝坂式終末期の土器や「在地化した勝坂式」にもまた、同じく村田川を境とする分布の偏在性が見出された(同2004:73-82)。これを内房地域について整理すると、③内房地域は「典型的な勝坂IV・V式」が中心的に分布し西関東からのダイレクトな土器情報の流入が想定される一方、「姥山B地点型深鉢」や「中峠6次1住型」などの変容・在地化した諸類型は分布が希薄な地域となり、④勝坂式情報が房総半島に広がるルートとして、北西部地域を経由して在地化した諸類型が展開する「北ルート」と、東京湾をこえて内房地域に典型的な勝坂式をもたらす「南ルート」が想定された(同2004:73-82)。加曽利E式成立期において、房総半島に伝播・展開する土器情報の地域偏差と、房総半島内部における当地域の土器群の特殊性が強調される。

これに関連して、上守秀明は木更津市伊豆山台遺跡SI005出土の加曽利E式成立の一括資料について、西関東の勝坂式終末期の土器群との対比、典型例からのリダクションについて検討しており、この時期の基準資料として注目される(上守2006)。

総括加曽利E I式段階については、山内の型式設定時より意識されていた「最も古い部分」の東西差が、房総半島内部では異質ともいえるほどに西関東的色彩を帯びる内房地域において、いかなる実態をもって展開するのかという点が焦点のひとつとなろう。この時期の細別について、最も細かい段階を設定する多摩・武蔵野地域の「新地平編年」(黒尾1995・2016、小林ほか2004)では、10期から11期を細別する加曽利E式系のメルクマールとして、撚糸地文から縄文地文への変化(10c期)、懸垂文の隆起帯から沈線への変化(11a期)があげられ、磨消縄文成立直前期(11c期)における縄文地文の加曽利E式系の衰退と連弧文系・曽利系の台頭もまた時期的な傾向として重視されている。隣接する「神奈川編年」(神奈川考古学財団2002)では、同様に文様要素の変化を加味しつつ、第I期～第III期(第I段階～第III段階)を細別するメルクマールとして、第II期における頸部無文帯の出現と喪失が時期的な傾向として重視されている。こうした他地域の細別編年で設定されたメルクマールについては、言わずもがな房総半島の資料には直接敷衍できない。しかしながら、前述のとおり加曽利E式成立期、あるいは加曽利E式の「最も古い部分」において西関東的色彩が強く表出することが予測される当地域については、その適用可能性を探り、編年的位置づけを検討することは十分に可能であろう。あるいは当地域においてこそ、当然あり得べき房総半島独自の変遷観と隣接地域の細別編年を架橋する要素、彼我の土器群の対応関係を検証しうる一括資料の探索が求められよう。

『図譜』以降、正面切って論じられることがなかった「最も古い部分」の東西差は、神奈川考古シンポジウムの安孫子昭二の発言(神奈川考古同人会1981:24)で以下のように整理された。曰く、加曾利E式成立段階の東西差として、「武蔵野台地側に分布する」「口縁部文様に横Sの字に隆帯を貼付け」「撚糸を縦に転がす」「頸部に無文帯をもつ方が多い」土器と、「関東東部から北関東にかけて密に分布する」「口縁部文様帯のモチーフがクランク状」で「地文が縄文であり」「口頸部の無文帯をもたない」土器があるという系統差である。その後、前者の土器については、「武蔵野台地型」(谷井1989、黒尾1995:40-44)として加曾利E式成立直前期(新地平9c期)に遡る資料も含め整理され、最終的に「胴部の撚糸地文が卓越し、勝坂式の文様要素を消失した口縁部に横S字モチーフを配した」土器⁽⁵⁾が、多摩・武蔵野地域における加曾利E式成立のメルクマールとなる土器(新地平10a期)として位置づけられた(徳留2016、中山2017)。

一方、後者の土器については、谷井彪により埼玉県花積貝塚2A住居の幅広い口頸部文様帯にクランク文ないしS字文を配す土器が「下総台地型」として注意され、加曾利E式成立期の土器に位置づけられた(谷井1989)。下総考古学研究会は、①「中峠式」の再検討により「中峠6次1住型深鉢」を抽出し、「やや外反する無紋の口縁の存在を除けば、加曾利E I式と区別は困難である」と留意しつつ中峠類型のひとつに位置づけた(下総考古学研究会1998:29)。またその型式学的変遷について、②東関東で在地化した勝坂V式の中から、大木8a式の影響を受けて中峠6次1住型深鉢が成立し、加曾利E式古段階の口頸部に集合沈線を多用しクランク文や大木式的な把手を持つ折衷的な土器「中峠6次1住-E I」に繋がるという展開を整理した(小澤ほか2014)。また③中峠6次1住型深鉢の時間的位置づけについては、層位的出土例が少ないことに留意しつつ、勝坂V式・阿玉台式後半、中峠0地点型深鉢・中峠5次2住型深鉢、加曾利E式古段階・大木8a式が並び行われていた時期に位置づけられ(下総考古学研究会2014:120-124、小澤ほか2014:169)、「中峠6次1住-E I」については、その分布が北関東東部から房総半島では村田川を南限としつつ、西は武蔵野台地まで広がることが確認された(小澤ほか2014:169-172)。

谷井により広く定義された「下総台地型」の加曾利E I式土器は、「中峠6次1住型深鉢」と「中峠6次1住-E I」の分離により系統関係が整理された観がある。しかしながら、その下限年代と系統的に前後する土器との時期的な分離には、いまだ不明瞭な部分が残る。江原英は北関東の加曾利E式成立期の土器様相を検討する中で(江原2006)、栃木県寺野東遺跡SK444・SI197出土土器を基軸に「中峠6次1住-E I」(小澤ほか2014:第6図15)が加曾利E I式中段階(埼玉編年IX b期)まで残存し、「中峠0地点型」についても寺野東遺跡SK333に代表される加曾利E I式古段階に位置づけながらも、加曾利E I式中～新段階までその影響を受けた土器を含めて残存するとしている(江原2006)。塚本師也は茨城県西原遺跡61号住居出土土器を検討する中で、口辺部に無文帯を持ち懸垂文を有する「中峠6次1住-E I」(小澤ほか2014:第5図20)を加曾利E I式古段階に位置づけ、東関東で在地化した勝坂V式(小澤ほか2014:第5図2)や中峠0地点型深鉢を含めて一括出土資料として評価している(塚本2010)。

「下総台地型」を含めた房総半島の加曾利E I式期の細分および他地域の細別編年との対応関係については、中峠類型や阿玉台IV式の下限年代の東西関東差(中山2017)を念頭において、まずは加曾利E I式古段階の定義を明確にする必要がある。新しい段階については、頸部無文帯が加曾利E I式の新古を区分する絶対的なメルクマールになり得るかという問題(山本1993、黒尾1995、谷口・永瀬2008)⁽⁶⁾がある。房総半島内外の地域差を考慮しながら層位的出土例を検討したうえで、付帯的要素を追加しメルクマールとして限定化していく作業が求められよう。

総括加曽利EⅡ式段階については、房総半島では非在地系土器として客体的に出土する曾利式土器・曾利式系土器の様相が重要である。このことについては大内(2009・2012)による研究史の整理と体系的な集成研究があるため、これを参照し以下にその要点を整理する。

房総半島における曾利式土器・曾利式系土器の展開については、主に出土する斜行文・重弧文土器の位置づけが焦点となる。谷口康浩は関東地方における曾利式情報の展開を数量的に分析・可視化し、その重層的な展開に関する見取り図を示した(谷口2002)。房総半島については、甲府盆地を中核とする曾利式分布圏の中心地からみて外縁地域(第6地帯)にあたり、オリジナルな曾利式土器は「ほぼ皆無となり」、「ほとんどの曾利式が著しく変形して在地化した紐線文系」に限定され、紐線文系が曾利式土器の本場ですでに衰退した後の加曽利EⅢ式期に展開することから、武蔵野・大宮台地などの「第5地帯からのきわめて限られた情報にしか接していなかったのではなかろうか」とされた(同:54)。一方、房総半島で出土する変形した紐線文系(斜行文・重弧文土器)については、従来より編年的位置づけに揺らぎがあり、磨消技法成立以前(埼玉編年Ⅹ期)を含む見方(小川1989)、曾利Ⅲ式として磨消技法成立以後のEⅢ段階(総括EⅡ段階)に限定する見方(戸田1991・2006)があった。また型式学的変遷を認め得る要素として、口縁部形態の差異についても、内側に「く」の字形の折り曲げないし口縁部加飾を持つものとそうでないものを、時期差とする説(小川1980)と、典型例から在地化への変化として時期差がありつつ房総半島では両者が並存し得るという説(戸田2006)に評価が分かれていた。

こうした状況をふまえ、大内は、房総半島の斜行文・重弧文土器を破片資料まで含めた悉皆的集成調査を行い、その編年的位置づけと分布の検討に基づき「千葉県域にみる遺跡毎の様相差」(戸田前掲:88)を明らかにした(大内2009・2012)。この時期の細別に関わる内容は以下の通りである。①新地平編年10・11期(総括EⅠ式段階)では広い無文の口縁部を持つ長胴甕や条線小甕などの古手の曾利式系土器(曾利Ⅰ・Ⅱ式)が房総半島全域で断片的に出土し、房総半島南部は南房総市深名遺跡の多量出土など影響の強さが認められる(大内2009:129)。②曾利式系土器Ⅰ類(斜行文・重弧文土器)は大半が新地平編年12a・b期(総括EⅡ式段階)以降に位置づけられ、11期以前に遡る例は少数で、確実に12c期(総括EⅢ式段階)に下る例はない(同:126-130)。③曾利式系土器Ⅰ類には広域型(斜行文・重弧文土器)と局所型(格子目文・矢羽根状沈線)が認められ、曾利式情報の流れに北西部経由と君津・安房経由の2ルートが想定される(同:130)。④曾利式系土器Ⅰ類の口縁部形態の差異については、出土状況からは積極的な時間差を見出すことはできず(同:128-129)、また11期に位置づけられる加曽利EⅡ式との折衷土器において両者が既に存在していることから型式学的にも積極的に時期差を見出すことはできない(大内2009:116-117)。⑤曾利式系土器Ⅰ類の中で明瞭な頸部文様帯を持つものは、加曽利E式のキャリパー形土器の3本1組の磨消懸垂文を持つ土器に伴い加曽利EⅢ式段階(総括EⅡ式段階)においてやや古相を示す(大内2006:122)。⑥加曽利E式土器での折衷的な土器として曾利Ⅳ式以降のつなぎ弧文土器の影響と考えられるキャリパー形の器形に矢羽根状沈線を施すものが、君津・安房地域に認められ、③の矢羽根状沈線の曾利式系土器Ⅰ類の分布と排他的な地域性が見出される(大内2009:120-121)。

房総半島で出土する曾利式土器・曾利式系土器はオリジナルの土器からの変容が著しく、一部の例外的な要素(①⑤)を除き、その型式学的位置付けをもってこの時期を細別する参照軸にはなりえないことが確認された(④)。しかしながら、大内の集成研究で見出された斜行文・重弧文土器の時期的な傾向、特に②の総括EⅡ式段階における急激な展開と総括EⅢ式段階での消滅という現象は、在地の加曽利E式土器

について、いまだに不明瞭な磨消技法出現前後の細別を検証しうる時期的な傾向として注目される。また総括E I 式段階に引き続き、総括E II 式段階の曾利式情報の展開についても、房総半島内部で地域偏差が見出される点(③⑥)は、房総半島の加曾利E式編年を考える上で重要な指摘である。

3 内房地域の加曾利E式期の土器集成

(1) 型式細分について

本稿における加曾利E式土器の区分および加曾利E式期の土器の時期区分は、前章で述べたとおり既報告にならい加曾利貝塚総括報告の基準(千葉市教育委員会編2017:429-430)に準拠する。但し総括加曾利E I 式段階については、本稿では勝坂・阿玉台終末期の土器と「中峠類型」を中期中葉末の諸類型を含む。中峠類型の判断は下総考古学研究会による再検討(下総考古学会編1998)に準拠した。曾利式系土器と連弧文系土器については、土器群に型的な変容(谷口2002・大内2009)が多く編年対比できないため型式細分していない。

(2) 作業方法と集成結果の概要

内房地域編での資料集成にあたっては、2022年8月段階で刊行されている発掘調査報告書を調査し、加曾利E式期の土器が出土している遺跡を抽出した。この結果をもとに、集成表(第1表)を作成した。なお、遺跡位置図と報告書一覧については、紙数の都合付編としてデジタル版でのみ掲載した。

(3) 住居跡一括資料および個体資料の検討

上記の集成結果のうち特に注目すべき一括資料と個体資料を抽出した。資料の抽出にあたっては、主に住居跡の炉体土器や埋設土器、床面直上から出土した土器を抽出し、覆土中から出土した土器については型式学的に重要と思われる土器があれば記載を分けて抽出した。また、報告者により時期区分・編年対比がなされている遺構については、遺構名末尾にその時期を()書きで示した。

① 市原市草刈遺跡群

市原市草刈遺跡群は、村田川以北に位置する房総半島の縄文時代中期を代表する環状集落である。村田川については、加曾利E式期の房総半島内部の様相を分かち文化的境界であることを、前章の研究史で確認したところである。したがって、土器群の地域性の把握にあたっては、村田川以南の他の内房地域の遺跡とは分けて検討すべき事例であるため、ここで項を分けて抽出した。但し遺構数が膨大であるため、紙数の都合、環状集落部分を含み住居跡・土坑の重複が激しいB区・H区の遺構のうち、型式学的に有意な資料を含み、切り合い関係が確認できる遺構や多くの一括資料を含む遺構を中心に抽出した。遺構名末尾には、前述の基準で判断した時期区分を【】書きで示した。

草刈遺跡H区 H388住居【総括E I 式段階】(第1図)

厚い貝層の覆土から大量の土器が出土している。上下の層でまとまりなく接合しているが、土層は攪乱の少ない堆積を示していることから、報文では土器片と貝が短期間で廃棄されたとされている。覆土中から、パネル文の勝坂式土器(1・2)、変容した勝坂式土器(3・4)、阿玉台式土器の把手破片(5)、大木式土器(6・7)、中峠0地点型深鉢と思われる眼鏡状突起破片(8)、無文の口辺直下に交互刺突文がめぐる土器(9)、口辺が無文で頸部に楕円区画を持つ土器(10)が出土している。

第1表 内房地域の加曾利E式期の遺跡

*1 住居跡の有無

No.	遺跡名	市町村	EI	EII	EIII	EIV	不明	*1	文献	No.	遺跡名	市町村	EI	EII	EIII	EIV	不明	*1	文献
1	山倉貝塚A地点・B地点	市原市		○					報1	87	市原条里制遺跡II B区II C区	市原市	○	○					報155
2	菊間遺跡	市原市					○		報3	88	伊丹山遺跡	袖ヶ浦市			○	○			報9
3	加茂遺跡C地点	市原市		○					報4	89	角山遺跡	袖ヶ浦市		○					報10
4	宮前遺跡	市原市					○		報4	90	苗見作遺跡	袖ヶ浦市		○					報23
5	萩ノ原遺跡	市原市	○	○					報5	91	西萩原遺跡	袖ヶ浦市		○					報37
6	南総中学遺跡	市原市		○	○			○	報6	92	未園崎遺跡	袖ヶ浦市					○		報35
7	土宇遺跡群No.100地点	市原市		○	○			○	報7	93	三ッ田台遺跡	袖ヶ浦市				○			報43
8	唐崎台遺跡	市原市		○					報8	94	滝ノ口向台遺跡	袖ヶ浦市	○	○				○	報44
9	上総国分僧寺跡北辺部	市原市						○	報11	95	二又堀遺跡	袖ヶ浦市		○	○				報45
10	番後台遺跡	市原市		○					報12	96	美生遺跡群	袖ヶ浦市		○					報48
11	神明台遺跡	市原市		○					報12	97	内出原遺跡	袖ヶ浦市		○					報52
12	諏訪古墳群4号墳西側	市原市		○					報13	98	嘉登遺跡	袖ヶ浦市				○		○	報57
13	瀬又北遺跡	市原市		○					報14	99	神田遺跡	袖ヶ浦市					○		報54
14	大木戸遺跡	市原市		○	○				報14	100	向神納里遺跡	袖ヶ浦市		○	○			○	報68
15	池ノ谷遺跡	市原市		○					報16	101	谷ノ台遺跡	袖ヶ浦市		○	○				報66
16	福増遺跡	市原市					○		報16	102	上ノ山遺跡	袖ヶ浦市		○					報76
17	草刈遺跡	市原市	○	○	○				報15	103	中六遺跡	袖ヶ浦市					○		報83
18	草刈遺跡B区	市原市	○	○				○	報17	104	根形台遺跡群	袖ヶ浦市		○					報95
19	外迎山遺跡	市原市					○		報19	105	前原遺跡	袖ヶ浦市		○					報105
20	上大堀遺跡	市原市		○					報24	106	猪尻遺跡	袖ヶ浦市					○		報108
21	南富士台遺跡	市原市				○			報21	107	上大城遺跡	袖ヶ浦市		○	○				報118
22	下鈴野遺跡	市原市		○				○	報18	108	下谷遺跡	袖ヶ浦市					○		報124
23	菊間手水遺跡	市原市		○					報21	109	嘉登遺跡	袖ヶ浦市				○			報127
24	唐沢遺跡	市原市		○					報19	110	上村古墳群	袖ヶ浦市					○		報131
25	天王台遺跡	市原市		○					報25	111	上宮台遺跡	袖ヶ浦市			○	○			報145
26	椿ヶ谷遺跡	市原市		○	○				報30	112	山野貝塚	袖ヶ浦市				○			報152
27	福増山ノ神遺跡	市原市					○		報29	113	滝ノ口向台遺跡	袖ヶ浦市		○					報151
28	草刈貝塚	市原市	○	○				○	報31	114	宮ノ越貝塚	袖ヶ浦市	○	○					報2
29	安久谷向ノ岱遺跡	市原市				○			報34	115	祇園貝塚	木更津市	○	○					報22
30	奉免上原台遺跡	市原市		○	○				報42	116	請西遺跡群野焼B地区	木更津市		○					報28
31	小谷1号墳	市原市		○					報41	117	上ノ山遺跡	木更津市		○					報27
32	山田橋亥の海道貝塚遺跡	市原市		○	○				報39	118	明石口遺跡	木更津市		○	○	○			報36
33	奈良大仏台遺跡	市原市	○	○				○	報38	119	花山遺跡	木更津市	○	○				○	報32
34	月崎寺の台遺跡	市原市	○	○	○				報51	120	大山台遺跡	木更津市		○					報46
35	待戸供養塚	市原市					○		報51	121	大畑台遺跡	木更津市						○	報53
36	草刈六之台遺跡	市原市	○	○				○	報50	122	台木A遺跡	木更津市		○	○				報61
37	南青野遺跡	市原市			○				報49	123	蓮華寺遺跡	木更津市		○					報64
38	能満上小貝塚	市原市		○	○	○		○	報55	124	峰ノ台貝塚	木更津市		○	○				報70
39	鶴舞子来遺跡	市原市		○					報58	125	赤坂台遺跡	木更津市		○					報75
40	上高根大作遺跡	市原市		○	○				報58	126	久野遺跡	木更津市						○	報81
41	村上遺跡	市原市		○					報60	127	伊豆山台遺跡	木更津市	○	○	○	○		○	報79
42	武士遺跡	市原市		○	○	○		○	報63	128	内屋敷遺跡	木更津市	○	○					報80
43	海保野口遺跡	市原市		○	○			○	報69	129	金二矢台遺跡	木更津市		○					報87
44	新生萩原野遺跡	市原市		○	○			○	報67	130	中越遺跡	木更津市		○					報96
45	山田橋表通遺跡	市原市			○	○			報78	131	小谷遺跡	木更津市		○					報101
46	市原条里制遺跡	市原市					○		報73	132	南羽鳥遺跡	木更津市				○			報98
47	大作頭遺跡	市原市		○					報74	133	笹子城跡	木更津市						○	報111
48	西広貝塚	市原市					○	○	報72	134	下野洞遺跡	木更津市		○					報111
49	喜多仲台遺跡	市原市		○					報82	135	野洞遺跡	木更津市		○					報120
50	喜多仲台遺跡	市原市	○	○				○	報84	136	田高台遺跡	木更津市				○		○	報123
51	新井花和田遺跡	市原市		○				○	報86	137	中台B遺跡	木更津市							報136
52	奈良大仏台遺跡	市原市		○					報88	138	内屋敷遺跡	木更津市		○					報148
53	坊作遺跡	市原市		○					報90	139	打越遺跡	木更津市					○		報149
54	加茂遺跡D地点	市原市		○	○				報89	140	大山台遺跡	木更津市		○					報146
55	下鈴野遺跡	市原市		○					報94	141	祇園貝塚	木更津市	○	○	○				報33
56	草刈遺跡東部地区	市原市	○	○				○	報91	142	豊田遺跡	君津市						○	報47
57	史跡上総国分寺跡	市原市		○					報100	143	豊田遺跡	君津市	○	○					報56
58	山田橋大山台遺跡	市原市			○	○		○	報99	144	戸崎城山遺跡	君津市		○					報56
59	西広貝塚	市原市					○		報110	145	西郷遺跡	君津市		○					報62
60	東国吉寺谷遺跡	市原市		○	○				報106	146	戸崎古墳群6号墳	君津市		○					報85
61	中野寺沢台遺跡	市原市		○					報106	147	戸崎城山遺跡O地点	君津市		○					報97
62	石神台遺跡	市原市		○					報104	148	寺沢出戸遺跡	君津市		○					報93
63	中潤ヶ広遺跡	市原市	○	○	○				報113	149	寺ノ代遺跡	君津市		○					報102
64	西広貝塚	市原市					○		報119	150	糞屋塚遺跡	君津市		○					報109
65	中潤ヶ広遺跡	市原市		○					報117	151	練木遺跡	君津市	○	○				○	報103
66	草刈遺跡K区	市原市	○	○					報115	152	三直貝塚	君津市	○	○					報112
67	草刈遺跡J区	市原市		○					報116	153	糸川上ノ台遺跡	君津市						○	報114
68	南中台遺跡	市原市		○	○				報121	154	向郷菩提遺跡	君津市		○					報122
69	山小川遺跡	市原市	○	○	○				報126	155	鹿島台遺跡D区	君津市	○	○				○	報135
70	川焼台遺跡	市原市		○				○	報125	156	三直貝塚	君津市		○	○				報144
71	草刈遺跡H区	市原市	○	○				○	報130	157	鹿島台遺跡C区	君津市	○	○	○				報141
72	草刈遺跡L区	市原市		○					報128	158	鹿島台遺跡B区	君津市	○	○					報144
73	草刈遺跡M区	市原市		○					報134	159	鹿島台遺跡	君津市		○					報140
74	野馬堀遺跡	市原市		○					報133	160	練木遺跡	君津市		○					報59
75	ナギノ台遺跡	市原市	○	○					報133	161	岩井遺跡	富津市	○	○					報65
76	草刈遺跡I区	市原市		○					報132	162	大寺山洞穴	館山市					○		報77
77	寺ノ台遺跡	市原市		○	○				報137	163	大寺山洞穴	館山市							報71
78	山小川遺跡	市原市		○	○	○		○	報138	164	大寺山洞穴	館山市		○					報107
79	天神台遺跡	市原市					○		報139	165	大寺山洞穴	館山市						○	報129
80	番後台遺跡	市原市		○					報141	166	東山遺跡	館山市		○					報143
81	草刈遺跡F区	市原市	○						報140	167	安房神社洞窟遺跡	館山市		○					報20
82	柏野遺跡	市原市		○	○				報142	168	古茂口城跡	館山市	○	○					報92
83	緑岡古墳群	市原市		○					報147	169	深名瀬島遺跡	南房総市	○	○	○			○	報153
84	久保堰ノ台遺跡	市原市		○	○			○	報147	170	吉井遺跡	南房総市		○					報20
85	能満分区遺跡群上小貝塚地区第4地点	市原市					○		報150	171	深名瀬島遺跡	南房総市	○	○	○				報92
86	瀬又小滝遺跡第2地点	市原市		○					報154										

草刈遺跡 B 区 538号住居【総括 E I 式段階】(第1図)

覆土の貝層中から完形に近い個体がまとまって出土している。まとまって出土した貝層中の資料には、「ほぼ完形の深鉢5個体をはじめ深鉢5点、浅鉢1点」という報文記載と掲載図から復元すると、阿玉台式土器(11)、大木式の影響を受けた阿玉台式土器(12)、中峠類型の土器(13・14・15)、口縁部～胴部に区画文を持つ筒型の土器(16)、勝坂式土器(17)、浅鉢(18)、波状文の口縁部文様帯や胴部懸垂文をもつ加曾利 E I 式土器(19・20)が含まれると考えられる。

草刈遺跡 B 区 195号住居【総括 E I 式段階】(第1図)

炉体土器として、大木式の要素が強い中峠 O 地点型(21)が出土している。床面より10cm程上層の覆土中にある埋葬人骨に中峠6次1住型(22)とクランク文の加曾利 E I 式土器(23)が伴う。

草刈遺跡 H 区 H103住居【総括 E I 式段階】(第1図)

炉跡から阿玉台式の把手を持つ土器(24)が出土し、床面からは、渦巻突起を持ち口縁部にクランク文と頸部に波状沈線を配す加曾利 E I 式土器(25)と口縁部が無文の土器(26)が、床面よりやや浮いた覆土から渦巻突起と口縁部に直線の隆帯区画を持つ加曾利 E I 式土器(27)が出土している。床面出土の26が覆土中の土器片と接合することから、覆土中出土の27も含めて一括性が高いと判断した。

草刈遺跡 B 区 517号住居【総括 E I 式段階】(第1図)

覆土下層から上層にかけての完形に近い個体がまとまって出土している。頸部無文帯を持つ加曾利 E I 式土器(28・29・30)のほか浅鉢(31)、口縁部文様帯を欠く土器(32)が出土している。

草刈遺跡 B 区 187A号住居・187B号住居・187C号土坑【総括 E I 式段階】(第2図)

187A号(古)→187B号(新)、187C号(古)→187B号(新)の切り合いが確認されている。

187A号では、覆土中から連続弧状線文をもつ変容した勝坂式土器(33)が出土している。187C号住居では、炉体土器(35)と覆土(34)から大木式系土器が出土している。187B号では、中央部貝層から加曾利 E I 式土器(36・37・38)が出土している。

草刈遺跡 H 区 H854・H855小竪穴【総括 E I 式段階】(第2図)

H855(古)→H854(新)の切り合いが確認されている。

H855では、床面から隆線が垂下する眼鏡状突起を有する土器(39)、中峠 O 地点型深鉢(40)、40に似る口縁部文様と胴部に大木 8 a 式的な文様を持つ鉢形土器(41)が出土している。H854では、床面から波状文の加曾利 E I 式土器(42)、3本1組の懸垂文と頸部区画線を持つ加曾利 E I 式土器(43)、浅鉢(44)、ラッパ状に開く口縁に渦巻文を配する土器(45)が出土している。

草刈遺跡 B 区 545・546土坑【総括 E I 式段階】(第2図)

545号(古)→546号(新)の切り合いが確認されている。

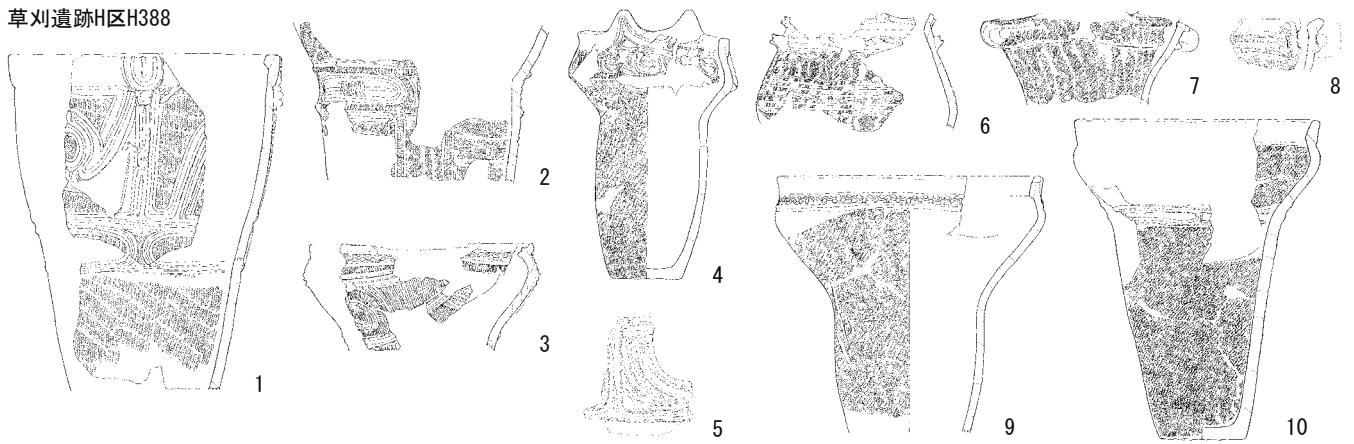
545号では、覆土から口縁部に波状文を配し頸部無文帯を持つ加曾利 E I 式土器(46)が出土している。546号では、覆土下層からクランク文の加曾利 E I 式土器(47)と浅鉢(48)が出土している。

草刈遺跡 B 区 207B・C号住居【総括 E I 式段階】(第2図)

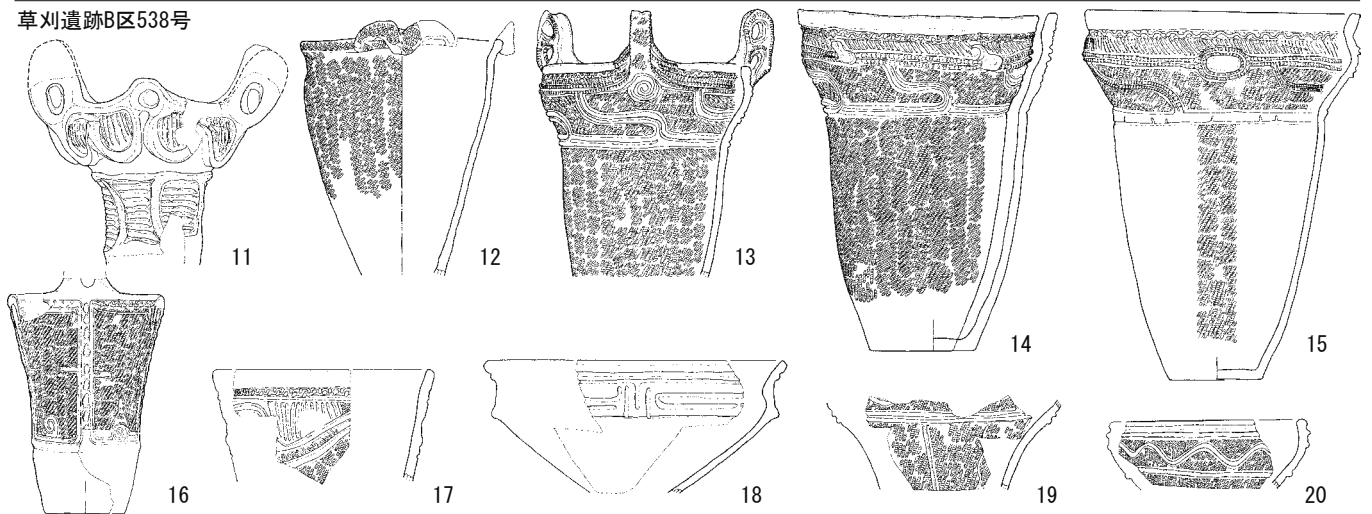
207C号(古)→207B号(新)の切り合いが確認されている。

207C号では、覆土中から頸部に僅かな無文帯を持つ加曾利 E I 式土器(49)が出土している。207B号では、床面から掘られた墓壇で人骨に伴って口縁部に三角文を配し3本1組の頸部区画線と懸垂文をもつ加曾利 E I 式土器(50)が出土している。

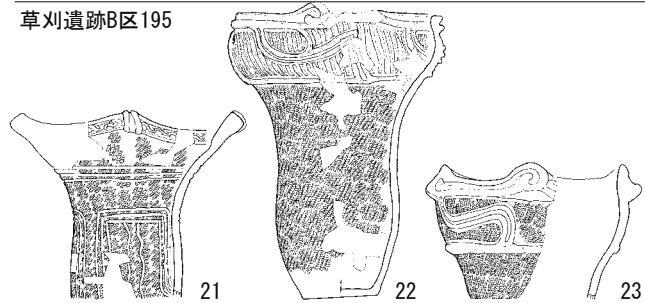
草刈遺跡H区H388



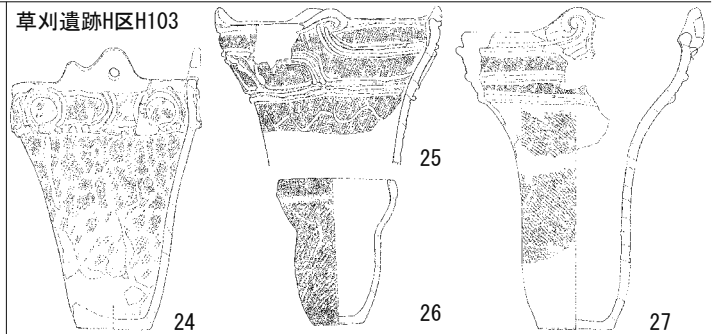
草刈遺跡B区538号



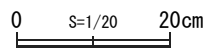
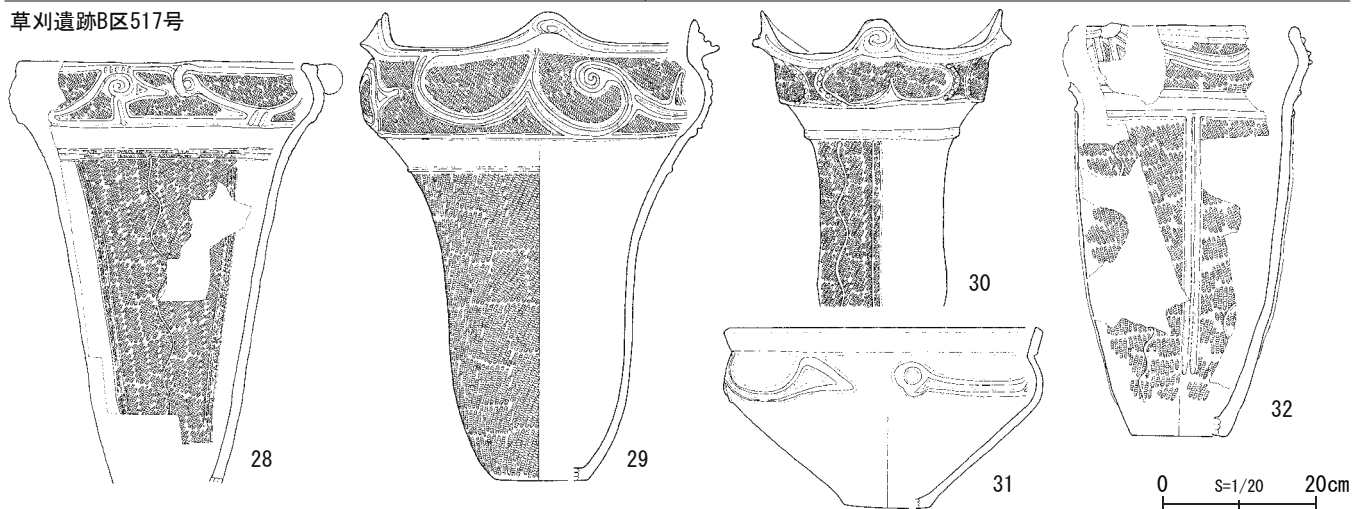
草刈遺跡B区195



草刈遺跡H区H103



草刈遺跡B区517号



第1図 草刈遺跡群抽出資料1 (S=1/10)

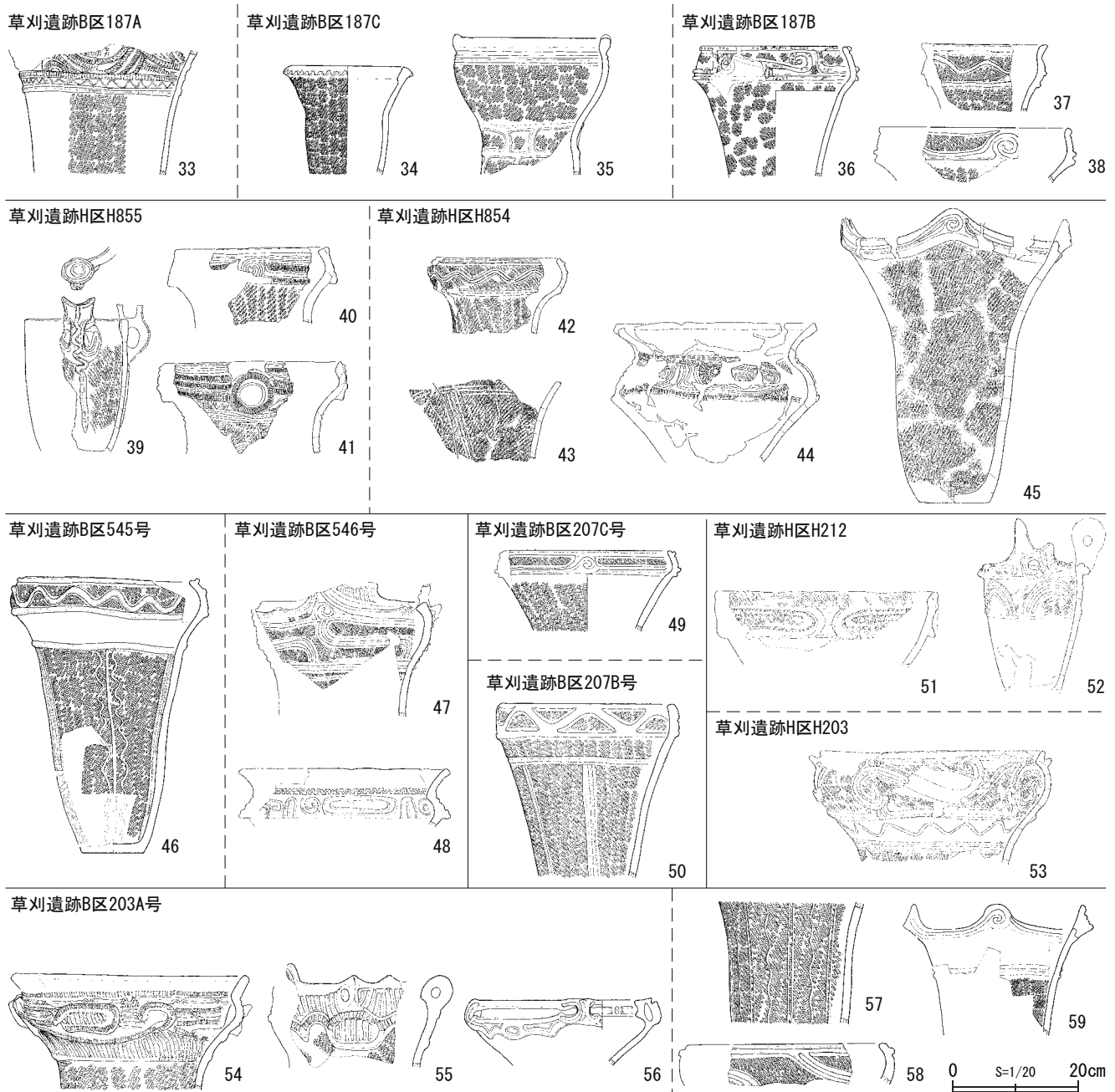
草刈遺跡H区 H203住居・H212小竪穴【総括E I 式段階】(第2図)

不明瞭ながら、H212(古)→H203(新)の切り合いが確認されている。H212では、床面から口縁部に楕円区画文を持つ土器(51)と阿玉台的な左右非対称の把手を持つ土器(52)が出土している。H203では、炉体土器として口縁部にS字文を配し頸部無文帯に蛇行線がめぐる加曽利E I 式土器(53)が出土している。

草刈遺跡B区 203A号住居【総括E I 式段階】(第2図)

覆土上層の貝層が伴う203A号(新)と下層の203A号(古)があり、別住居と考えられる。

203A号(古)では炉体土器として連続弧状線文の土器(54)が出土している。覆土中からは中峠類型の範疇に含めうる土器(55)と浅鉢(56)が出土している。203A号(新)では、加曽利E I 式土器(57・58)や人骨に伴ってラッパ状に開く口縁に渦巻文を配する土器(59)が出土している。



第2図 草刈遺跡群抽出資料2 (S=1/10)

草刈遺跡B区 178B・178C・178D号住居【総括E I・E II式段階】(第3図)

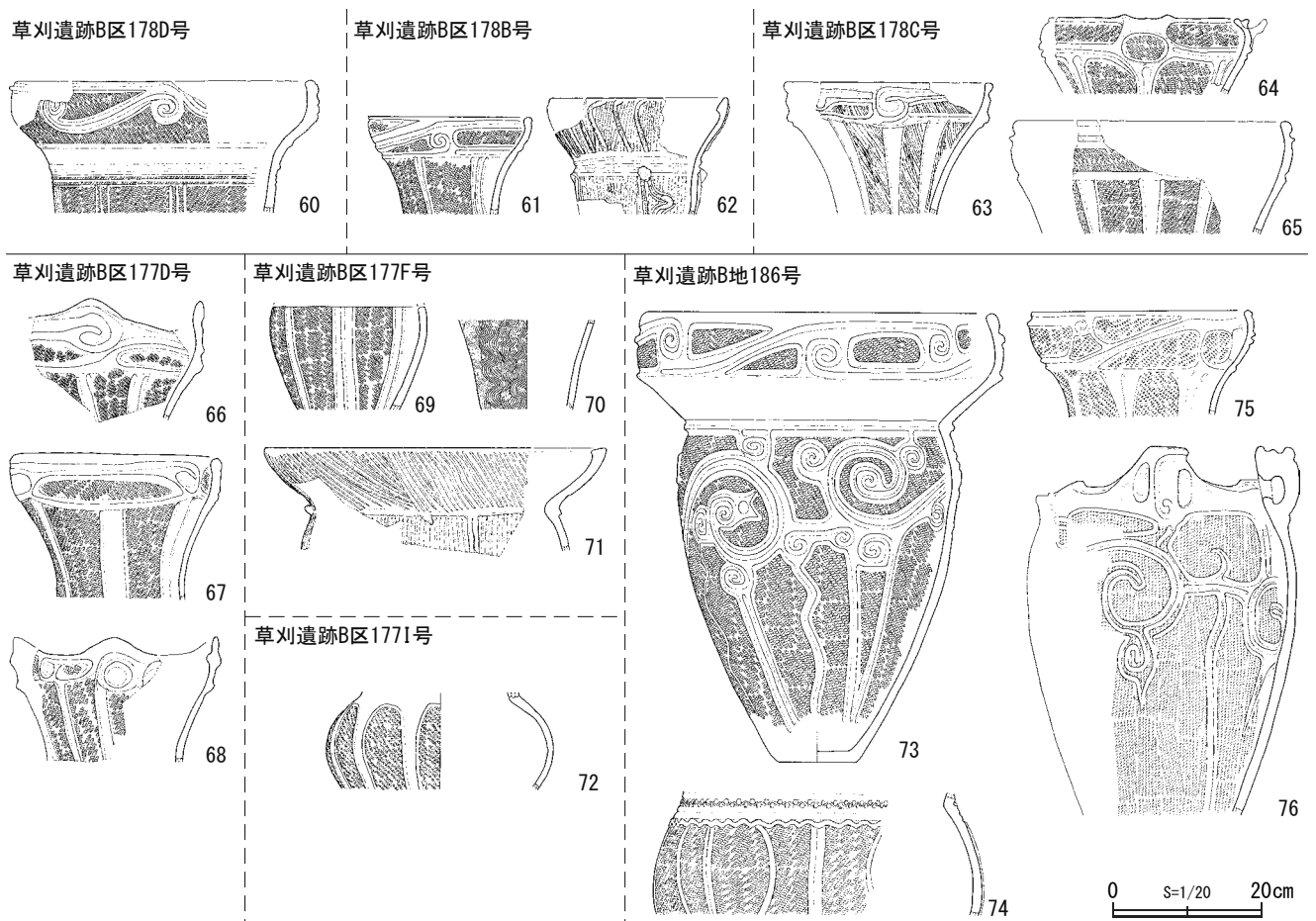
178D号(古)→178B号→178C号(新)の切り合いが確認されている。

178D号では、壁際から頸部無文帯を持つ加曾利E I式土器(60)が出土している。口縁部はS字に近い渦巻文で、胴部には3本1組の懸垂文が垂下する。178B号では、炉体土器として2～3本1組の磨消懸垂文を持つ加曾利E II式土器(61)が出土している。覆土貝層中から格子目状文の曾利式系土器(62)が出土している。178C号では、覆土中から加曾利E II式土器(63・64・65)などが出土している。63は条線地文、64は胴部地文が丸く閉じる。

草刈遺跡B区 177D・177F・177I号住居・186号土坑【総括E II式段階】(第3図)

177D号(古)→177F号→177I号→186号(新)の切り合いが確認されている。

177D号では、土器片囲い炉として加曾利E II式土器(66・67)が出土している。覆土中からは、口縁部区画がやや崩れた加曾利E II式土器(68)が出土している。177F号では、2基の炉体土器が検出され、それぞれ胴部破片で、3本1組の磨消懸垂文を持つ加曾利E II式土器(69)と楡描文地文の土器(70)が出土している。覆土からは、斜行文の曾利式系土器(71)が出土している。177I号では、炉体土器として壺形の加曾利E II式土器(72)が出土している。186号では、土坑床面のピット底面から意匠充填系萌芽段階の土器(73)と頸部に交互刺突文がめぐる土器(74)、ピット覆土から口縁部区画は比較的明瞭だが胴部地文が丸く閉じる加曾利E II式土器(75)と大木9式土器(76)が出土している。



第3図 草刈遺跡群抽出資料3 (S=1/10)

② 総括加曽利E I 式段階 (第4図)

木更津市伊豆山台遺跡 SI005 (伊豆山台第2期)

炉体土器として、中峠類型あるいは勝坂・阿玉台・大木式的要素を持つ土器 (75) が出土している。床面～覆土下層を中心に、口縁部上半に波状文を持つ大木式系の土器 (76)、波状に開く口縁端部に渦巻文を配する土器 (77・78)、円筒形の勝坂式土器 (79・80・81) などがまとまって出土している。

君津市鹿島台遺跡B区 個体資料 (第4図)

SI212出土で、口縁部にS字文を配し胴部に3本1組の隆起帯の懸垂文を持つ撚糸地紋の加曽利E I 式土器 (82) がある。なお、詳細な出土状況は不明ながら、同一レベルから縄文地紋で口縁部区画文を持つ加曽利E I 式土器破片が出土している。

木更津市伊豆山台遺跡 SI036・040 (伊豆山台第2期) (第4図)

SI-036 (古) → SI-040 (新) の切り合いが確認されている。

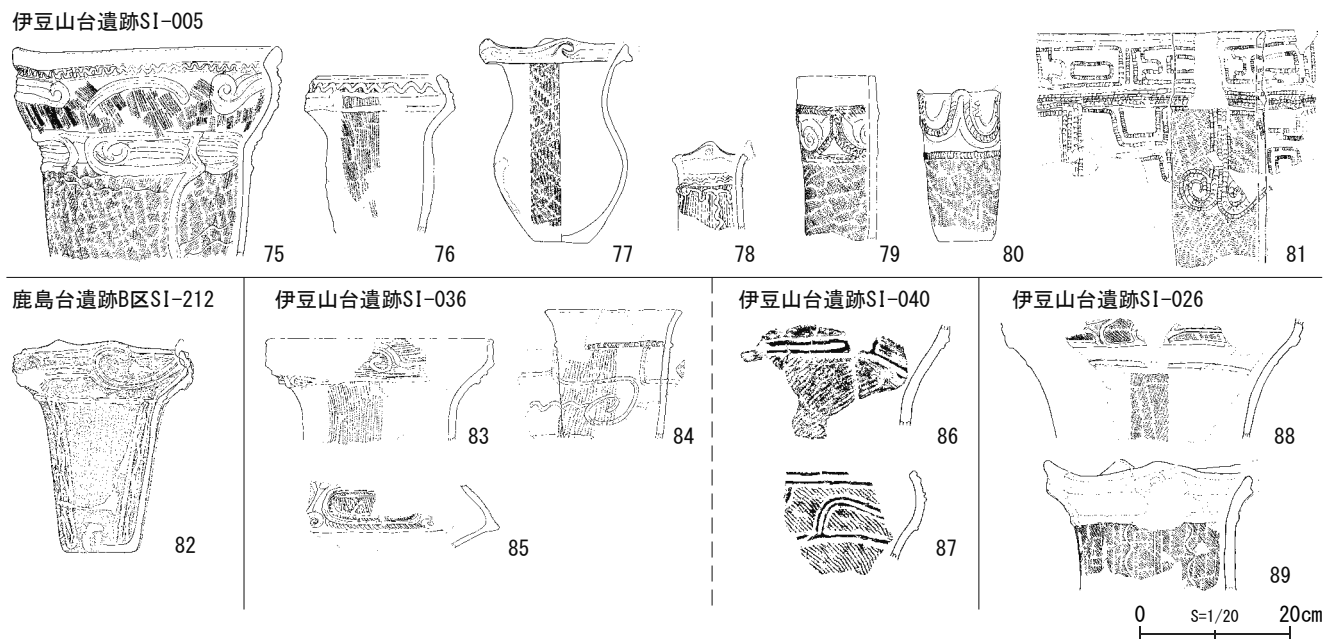
SI-036では、炉体土器として撚糸地紋の加曽利E I 式土器 (83) が出土している。詳細な出土状況は不明だが、83の近くから大木8 a 式的な胴部文様を持つ土器 (84) が出土している。SI-032で本址との境界から出土した、「く」の字に屈曲する文様帯に勝坂式的な文様を配する土器 (85) は報文では本址に伴うと判断されている。SI-040では、埋設土器として頸部が無文で隆起帯で区画する土器 (86) が出土している。詳細な出土状況は不明ながら、覆土からクランク文の加曽利E I 式土器 (87) が出土している。

木更津市伊豆山台遺跡 SI026 (伊豆山台第3期) (第4図)

埋設土器として、頸部無文帯をもつ加曽利E I 式土器 (88) と波状に開く口縁端部に渦巻文を配する土器 (89) が入れ子状に重なって出土している。

③ 総括加曽利E I ~ E II 式段階

総括加曽利E I 式段階の中でも新しい段階に属すると判断した資料と、報告書からは懸垂文間の磨り消しの有無が確認できない、もしくは不明瞭である資料を抽出した。



第4図 総括加曽利E I 式段階抽出資料 (S=1/10)

君津市鹿島台遺跡D区 SI-036 (第5図)

炉体土器として、頸部無文帯を持つ加曾利E I 式土器(90)が出土している。図版写真を見ると、床面から90に類似し頸部区画線のない加曾利E I 式土器(91)が、また詳細は不明ながら、覆土から口縁部が無文で頸部区画文を持つ土器(92)、明瞭な頸部文様区画を持つ曾利式系土器(93・94・95)が出土している。

君津市鹿島台遺跡B区 SI-089 (第5図)

炉跡から3本1組の懸垂文がめぐる連弧文系土器(97)と頸部文様帯を持つ重弧文の曾利式系土器(98)が出土しており、埋甕として口辺部に縄文を施し3本1組の懸垂文を持つ加曾利E I 式土器(96)と98の破片が出土している。96・97はともに沈線間は磨り消されていない。

市原市中潤ヶ広遺跡 C045号住居跡(中潤I期、新地平11c期)(第5図)

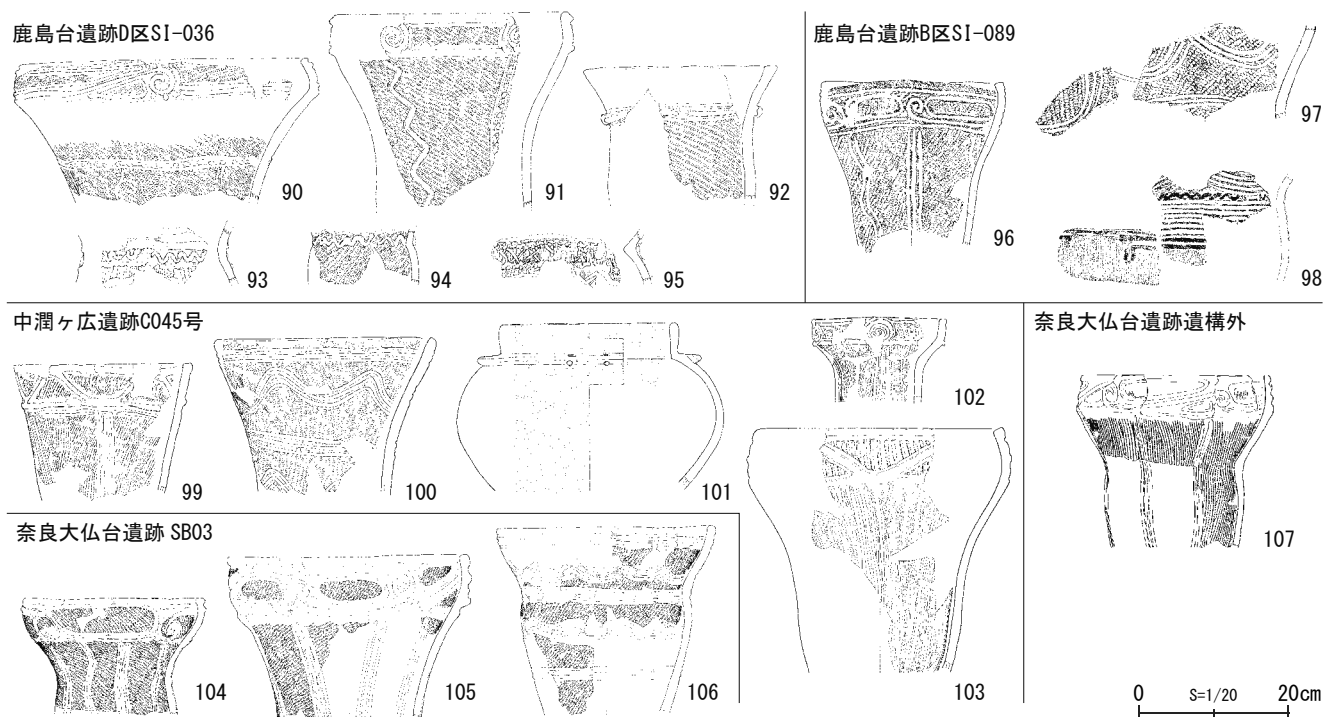
多量の土器片を使った土器片囲い炉が検出されている。土器片は、口縁部に三角文を配し3本1組の懸垂文を持つ撚糸地文の加曾利E I 式土器(99)、3本1組の沈線の連弧文系土器(100)、有孔鏝付土器(101)で構成される。住居床面から土器片囲い炉の土器に接合する破片、3本1組の懸垂文を持つ撚糸地文の加曾利式E I 土器(102)、無文の浅鉢が出土し、ピットから3に似る条線地文の土器(103)が出土している。

市原市奈良大仏台遺跡 SB003 (第5図)

土器片囲い炉として、3本1組の沈線の懸垂文を持つ加曾利E式土器2点(104・105)が出土している。図版写真を見る限り、懸垂文間の磨り消しは不明瞭である。覆土・床面の詳細は不明ではあるが、確認調査で覆土の範囲からまとまって出土した土器片の中に3本1組の沈線の連弧文系土器(106)がある。但しこの覆土の土器片には磨消懸垂文を持つ土器も含まれる。

市原市奈良大仏台遺跡 個体資料 (第5図)

遺構外出土で、3本1組の沈線の懸垂文を持つ撚糸地文の加曾利E式土器(107)がある。図版写真を見る限り、懸垂文間の磨り消しは不明瞭である。



第4図 総括加曾利E I ~ II 式段階抽出資料 (S=1/10)

④ 総括加曾利EⅡ式段階

一部のキャリパー形土器は総括加曾利EⅢ式段階に含まれる可能性がある。

市原市中潤ヶ広遺跡 A130号住居跡(中潤Ⅱ期、新地平12a期)

多量の土器片を使った土器片囲い炉が検出されている。土器片は、懸垂文と口縁部～胴部に懸垂文と対向するU字文を配する土器(108)、3本1組の沈線の連弧文系土器(109)で構成される。

市原市中潤ヶ広遺跡 E011号住居跡(中潤Ⅱ期、新地平12a期)

土器片囲い炉として加曾利EⅡ式土器(110)が出土しており、床面から1に接合する破片、3本1組の波状沈線が2段めぐり胴部懸垂文を持つ連弧文系土器(111)が出土している。

市原市中潤ヶ広遺跡 C037号住居跡(中潤Ⅱ-Ⅲ期、新地平12a・b期)

多量の土器片を使った土器片囲い炉が検出されている。土器片は、口縁部区画がやや崩れる加曾利EⅡ式土器(113)、3本1組の沈線で波状意匠を重ねる連弧文系土器(112)、斜線文の曾利式系土器(114)、無文の浅鉢で構成される。また炉の近くの床面から波状口縁の連弧文系土器(115)が出土している。

木更津市伊豆山台遺跡 SI-066(伊豆山台第4期)

多量の土器片を使った土器片囲い炉が検出されている。土器片は、加曾利EⅡ式土器(117・118)と波状口縁で2本1組の沈線の連弧文系土器(116)で構成される。

市原市馬立塚ノ台遺跡(土宇遺跡) 第35号住居

多量の土器片を使った土器片囲い炉が検出されている。土器片は、加曾利EⅡ式土器(121・122・123)と紐線文をもつ条線地文の土器(120)で構成される。また床面から3本1組の波状沈線がめぐり胴部懸垂文を持つ連弧文系土器(119)が出土している。

久保堰ノ台遺跡2 SK022

加曾利EⅡ式土器(124・125・126)が折り重なった状態で一括出土している。125は口縁部区画が崩れており磨消幅が広い。126は波状口縁で口頸部の文様がパネル化している。

木更津市伊豆山台遺跡 SI056炉体土器(伊豆山台第4期)

別住居に伴うとされる炉体土器として、口縁部区画が崩れる加曾利EⅡ式土器(127)と頸部無文帯を持つ加曾利E式土器(128)が入れ子状に重なって出土している。128は隆線による頸部区画線と懸垂文がパネル化しており、隆線脇は沈線でなぞられている。

木更津市伊豆山台遺跡 SI-060(伊豆山台第4期)

炉体土器として口縁部に三角文を配する加曾利EⅡ式土器(129)が出土しており、埋設土器としてそれぞれ加曾利EⅡ式土器(130)と口縁部文様帯と頸部無文帯をもつ縄文地文の曾利式系土器(131)が出土している。また床面直上から磨消懸垂文の中に蕨手文を持つ加曾利EⅡ式土器(132)が出土している。それぞれの土器に型式学的には時間差が認められるが、建替え痕跡はないと報告されている。

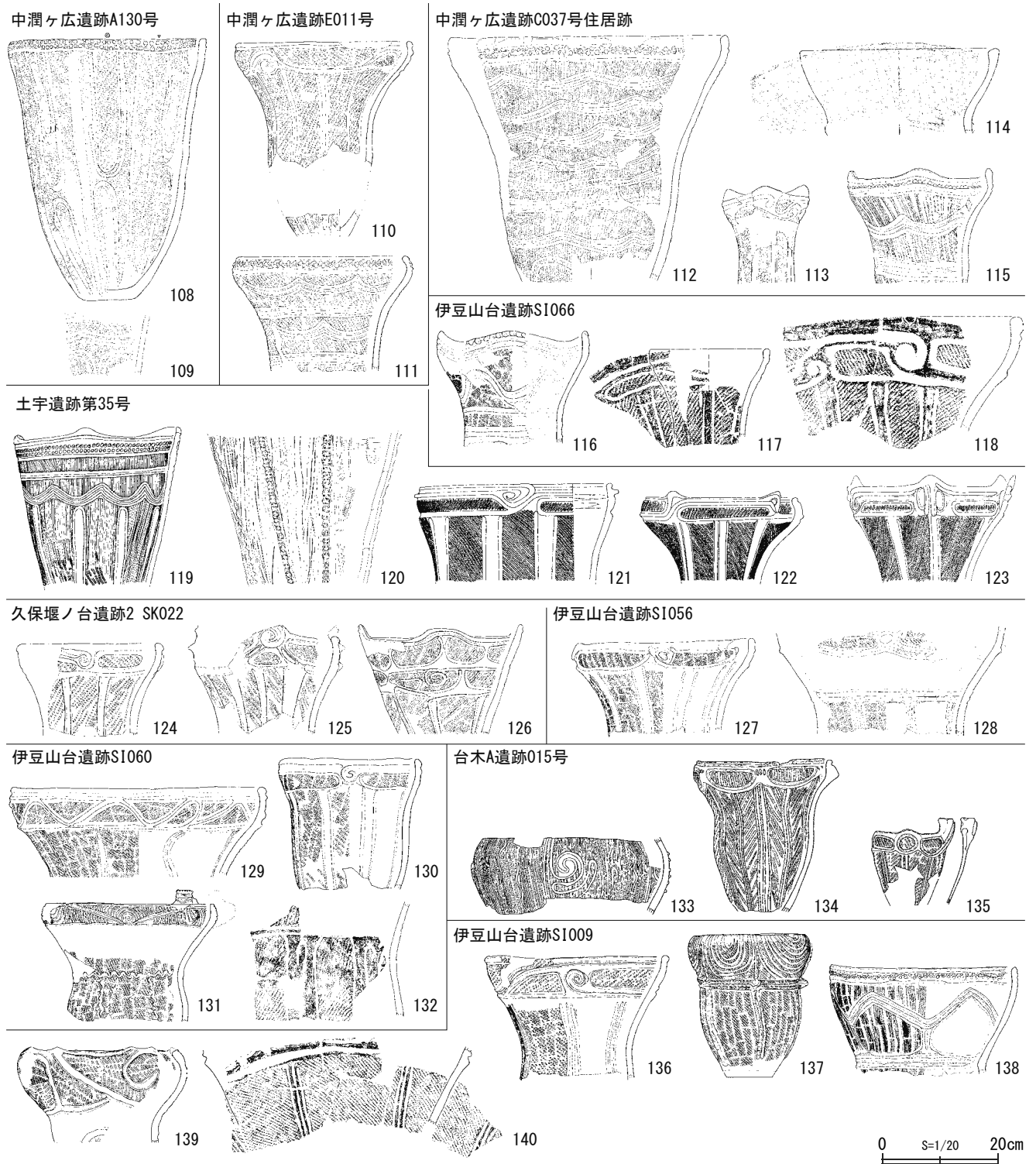
木更津市台木A遺跡 015号住居(台木中期1期)

炉体土器として紐線による渦巻文を配す曾利式系土器(133)、埋甕として口縁部に弧つなぎ文を配し矢羽根状沈線を持つキャリパー形の土器(134)が出土している。また床面から口縁に突起を配し3本1組の懸垂文を持つ小型の加曾利EⅡ式土器(135)が出土している。

木更津市伊豆山台遺跡 SI-009(伊豆山台第4期)

炉穴から3基の炉体土器が検出され、それぞれ3本1組の磨消懸垂文を持つ加曾利EⅡ式土器(136)、

縄文地文の曾利式系土器(137)、3本1組の沈線の連弧文土器(138)が出土している。遺構図や図版写真を見る限り、炉穴には切り合いがあり、137が古く138が新しい可能性がある。埋設土器として、3本1組の磨消懸垂文を持つ加曾利EⅡ式土(140)が出土しているが、覆土中から出土した口縁部区画が大きく崩れ頸部無文帯を持ち胴部に複浮線の意匠を配する土器(139)とともに、本址に重複しより新しいと推測されるSI-004に帰属する可能性がある。



第6図 総括加曾利EⅡ式段階抽出資料1 (S=1/10)

木更津市台木A遺跡 007号住居(台木中期2期)

多量の土器片を使った土器片囲い炉が検出されている。土器片は、加曾利EⅡ式土器(141・142・143)と磨消懸垂文を持つ斜線文の曾利式系土器(144)で構成される。そのほか埋甕として加曾利EⅡ式土器(145)が、床面から加曾利EⅡ式土器(146)が出土している。加曾利EⅡ式土器には、口縁部区画が明瞭なもの(143・145)、不明瞭なもの(141・146)、不明瞭かつ頸部無文帯を有し懸垂文の先端が蕨手状になるもの(142)がある。また詳細は不明ながら、004号住居の土器と接合する破片が出土している。

木更津市台木A遺跡 004号住居(台木中期2期)

複数回の建替えが想定される住居から新旧2つの土器片囲い炉が検出されている。古い炉は、口縁部区画が崩れ胴部地文が閉じる加曾利EⅡ式土器(148)と3本1組の波状沈線がめぐり胴部磨消懸垂文を持つ連弧文系土器(147)で構成され、新しい炉は、紐線文の曾利式系土器(149・150)で構成される。また床面から波状口縁の加曾利EⅡ式(151)が出土している。床面より10cm浮いた覆土から、懸垂文が口縁部でY字文になる土器(152)、意匠充填系萌芽段階の土器(154・155)、浅鉢(153)が出土している。

木更津市台木A遺跡 050・051号住居(台木中期1・2期)

新旧関係は不明瞭としつつ050住居(古)→051住居(新)の切り合いが想定されている。

050号住居では新旧2つの土器片囲い炉が検出されており、古い炉は斜線文の曾利式系土器(157)、新しい炉は加曾利EⅡ式土器(158・159)で構成される。159は口頸部が条線文になる曾利式折衷土器である。また埋甕として加曾利EⅡ式土器(156)、新しい炉を覆って加曾利EⅡ式土器(160)と口辺に刺突列がめぐり文様帯を欠く土器(161)が出土している。覆土中層(4層)から口縁部区画が崩れ頸部無文帯を持つ加曾利EⅡ式土器(162)や連弧文系土器(163)が出土している。162は胴部に蕨手文が配される。051号住居では、土器片囲い炉を構成する土器片として加曾利EⅡ式土器(164・165・166)が出土している。166は胴部懸垂文が口縁部でY字文になる。床面から意匠充填系萌芽段階の土器(167)が出土している。

⑤ 総括加曾利Ⅲ・Ⅳ式段階

ここでは「加納編年」(加納1989・1994)以降に刊行された報告書の資料のみを抽出している。

木更津市伊豆山台遺跡 SI017(伊豆山台第5期)

壁溝内から口縁部に渦巻文を充填する加曾利EⅢ式キャリパー形土器(168)が出土している。遺構図と図版写真からの判断となるが、3本1組の磨消懸垂文をもつ加曾利E式土器(169)が、床面とやや浮いた覆土中でまとまって出土している。懸垂文の上端がやや蕨手状になる。加曾利EⅢ式段階と判断した。

市原市寺ノ台遺跡(第2次調査) SI02

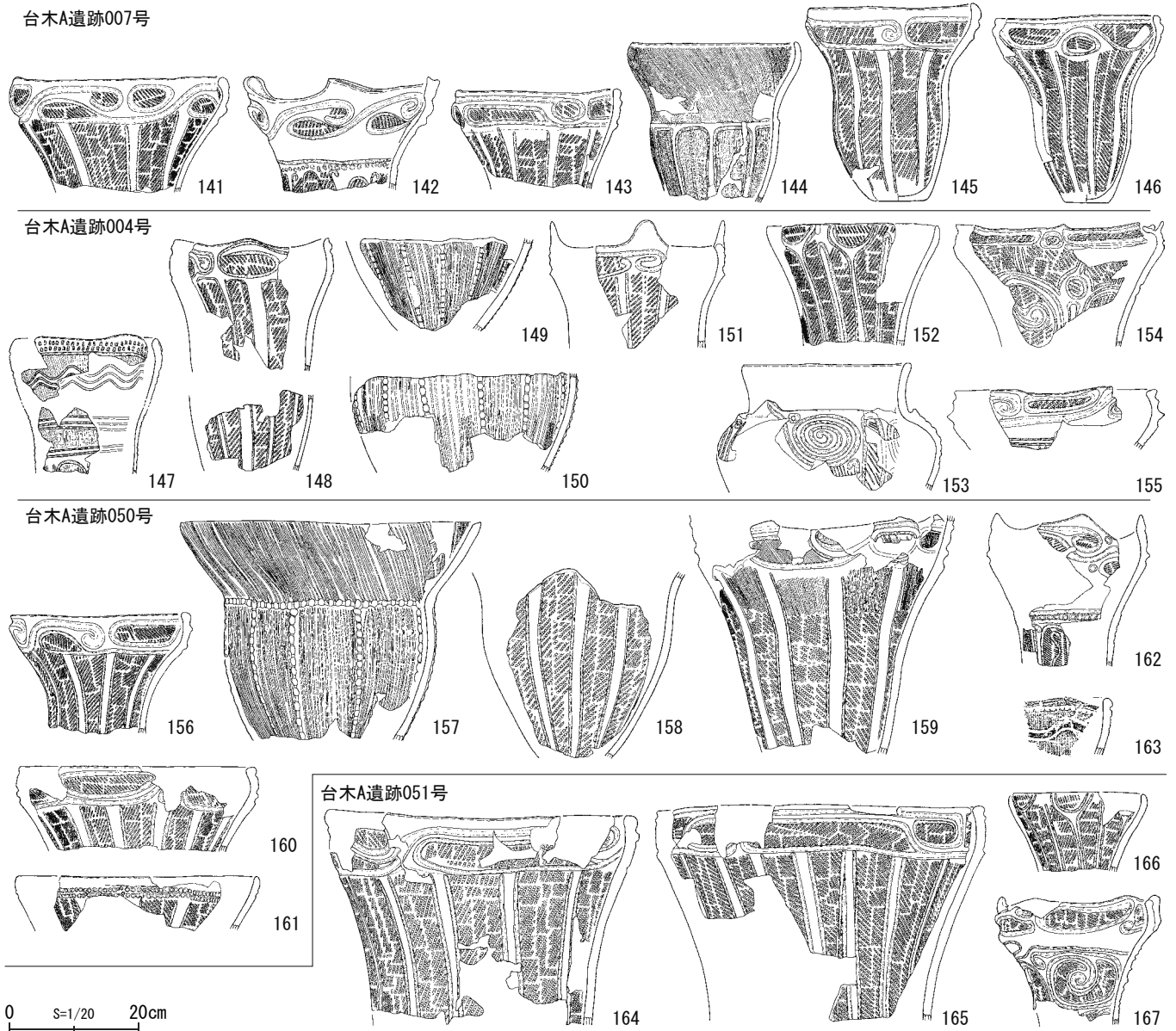
炉体土器と考えらえる全面縄文の土器(170)、付近の炉跡から口縁部文様区画と頸部無文帯を持つ胴部意匠充填系土器(172)、床面から複浮線の意匠充填系土器(171)が出土している。

市原市山田橋大山台遺跡 7号竪穴

床面から沈線文の加曾利EⅢ式土器2点(173・174)や磨消懸垂文を持つ胴部破片(175)が出土している。報文では「床面付近で出土した破片の一部は、抜かれた炉囲いの一部であった可能性がある」とある。

市原市海保野口遺跡 120住居

多量の土器片を使った土器片囲い炉が検出されている。土器片は、単浮線の意匠充填系土器(176)、複浮線の意匠充填系土器(177)、沈線文の加曾利EⅢ・EⅣ式土器(178)で構成される。また埋甕として口縁部文様帯を欠く磨消懸垂文を持つ土器(179)が出土している。



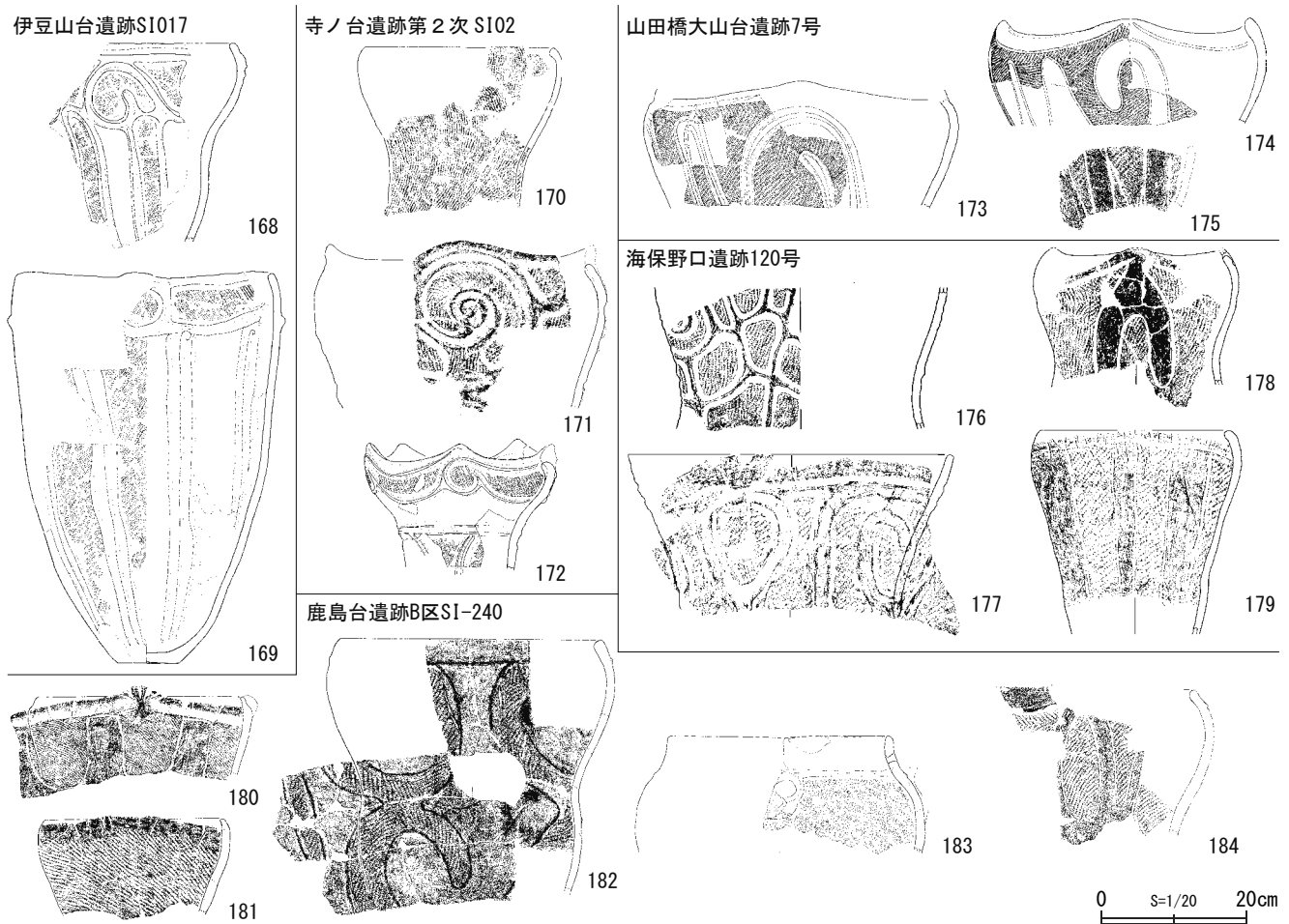
第7図 総括加曾利EⅡ式段階抽出資料2 (S=1/10)

君津市鹿島台遺跡B区 SI-240

多量の土器片を使った土器片囲い炉が検出されている。土器片は、沈線文の加曾利EⅢ式土器2点(180・182)、有孔鏝付土器(183)、口縁部が無文で全面縄文の形土器(181)などで構成される。また床面から沈線文の加曾利EⅢ式土器(184)が出土している。

註

- (1) 本稿以降、中期の房総半島の著しい土器情報の地域偏差を考慮し、大木式、勝坂・阿玉台式、「中峠類型」などの周辺型式についても、加曾利E式土器と良好な一括資料をなす資料は集成対象に加えることとする。
- (2) ここでいう胴部磨消懸垂文の一般化は、原義としては、山内清男の加曾利E式細別法における「新しい部分」を分かつメルクマールとしての「縄紋の抹消の一般化」である。但しここでは黒尾和久が強調するところの評価(黒尾1995:61-71)が重要である。要約すれば、①山内の細別編年について、「最も古い部分」の東西関東の地域差が、「古い部分」に



第7図 総括加曾利E II式段階抽出資料2 (S=1/10)

かけて解消されていくという整理、②頸部無文帯の有無は、地方差あるいは土器のタイプにより時期的な傾斜があり、明確なメルクマールたりえないという指摘、③そのうえで文様帯の消長ではなく文様要素に着目した加曾利E式細別法として『図譜』の理解、④E I式=「古い部分」、E II式=「新しい部分」の文脈において、E II式の下方拡大を防ぐ意味での「新しい部分」のメルクマールとして胴部磨消懸垂文の一般化の再評価である。

- (3) 但し大内自身が指摘するところであるが、通常は連弧文土器が客体的な存在である房総半島では、「連弧文土器の最盛期」という概念で時期区分できない点で、磨消技法成立前後の時期の細別において隣接地域との対比に課題がある。
- (4) 総括では「勝坂式・阿玉台末式／加曾利E I 古」段階を設定し、「中峠類型」を含む時期を分離し「北貝塚2区では(中略)平面的な分布を異にしているため、時期的に区分できることは確実であろう」(千葉市教育委員会編2017:429)としている。但し房総半島のE I式古段階の定義には課題が残ることから、本稿ではまとめて総括E I式段階とする。
- (5) 9c 期の過渡期的な土器と区別される10a 期の「武蔵野台地型」の厳密な定義については黒尾2004註4を参照。
- (6) 加曾利E I 式の頸部無紋帯については、各地の細別編年で時期的に新しい傾向として位置づけられているが、かつてより『図譜』図版81-1の土器(「多少武蔵野方面の地方色を持って居る」)や神奈川考古シンポジウムの安孫子発言(神奈川考古同人会1981:24)にあるように、西関東的な地方差との評価もある。また量的な多寡はあれど、E I 式古段階から継続してみられる要素であり、時期的なメルクマールたりえないとの指摘(黒尾1995:62-66、谷口・永瀬2008)もある。E I 式新段階の上限年代を決め得る時期的な傾向があるとする立場においても、撚糸地文などの付帯要素を加味することでメルクマールとして限定化できると評価されている点(山本1993:56)に注意したい。

引用文献 *紙数の都合、副題等は省略した。

- 江原 英 2006 「阿玉台式の伝統と「中峠式0地点型」の成立（覚書）」『栃木県考古学会誌』27
- 大内千年 2008 「千葉県における小規模集落の分析」『縄文研究の新地平（続）』考古学リーダー 15
- 2009 「中期の非在地系土器」『研究紀要』26 千葉県教育振興財団文化財センター
- 2012 「房総半島における非在地系土器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』167
- 大内千年ほか 2006 『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－市原市中潤ヶ広遺跡（上層）－』千葉県教育振興財団
- 小川和博 1980 「千葉県成田市宝田山ノ越貝塚研究素描」『奈和』18
- 1989 「南房総における加曽利E式土器」『集報』XI 日本考古学研究所
- 小澤政彦ほか 2014 「中峠6次1住型深鉢の研究」『下総考古学』23
- 神奈川考古学財団 2002 「神奈川における縄文時代文化の変遷VI」『かながわの考古学』2002
- 神奈川考古同人会 1980 『神奈川考古』10
- 1981 『神奈川考古』11
- 加納 実 1994 「加曽利EⅢ・Ⅳ式土器の系統分析」『貝塚博物館紀要』21
- 上守秀明 2006 「木更津市伊豆山台遺跡SI005出土土器について」『千葉縄文研究』1
- 黒尾和久 1995 「縄文中期集落遺跡の基礎的研究（Ⅰ）」『論集宇津木台』1
- 2016 「加曽利E式」『シンポジウム縄文研究の地平2016（発表要旨）』
- 黒尾和久・小林謙一・中山真治 1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『縄文集落研究の新地平（発表要旨・資料）』
- 小林謙一・中山真治・黒尾和久 2004 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（補）」『シ縄文集落研究の新地平3－勝坂から曾利へ－発表要旨』
- 佐藤 洋 2019 「加曽利E式土器資料集成研究①」『貝塚博物館紀要』45
- 下総考古学研究会 1998 「中峠式土器の再検討」『下総考古学』15
- 2004 「房総半島における勝坂式土器の研究」『下総考古学』18
- 2011 「房総半島および周辺地域における大木式諸型式（7b式～8b式）の研究」『下総考古学』22
- 2014 「千葉県松戸市中峠遺跡第6次調査の成果」『下総考古学』23
- 谷井 彪 1987 「加曽利E式土器における口縁部文様と形態の系譜」『柳田敏司先生還暦記念論文集 埼玉の考古学』
- 谷井 彪ほか 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要1982』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷口康浩 2002 「縄文土器型式情報の伝達と変形」『土器から探る縄文社会』山梨県考古学協会
- 谷口康浩・永瀬史人 2008 「土器型式情報の伝達と変容」『縄文時代の考古学7土器を読み取る』同成社
- 千葉市教育委員会 2017 『史跡加曽利貝塚総括報告書』
- 塚本師也 2010 「鬼怒川・小貝川流域の加曽利EⅠ式期の土器」『茨城県考古学協会誌』22
- 徳留彰紀 2016 「武蔵野・多摩地域周辺の土器系統：武蔵野台地北東部の勝坂／加曽利E式」『縄文研究の地平2016（発表要旨）』
- 戸田哲也 2006 「曾利Ⅲ式土器の伝播と変容」『ムラと地域の考古学』同成社
- 1991 「東京湾を渡った縄文人」『東邦考古』15
- 中山真治 2017 「勝坂3式の多様な系統と加曽利EⅠ式との「間」」『縄文研究の地平2017（発表要旨・資料集）』
- 山本考司 1993 「神奈川県における加曽利E式の変遷について」『神奈川考古』29